

# 日本人学校へ赴任できず

# 教員オンラインで奮闘

海外の日本人学校に本年度派遣される予定だった教員が、新型コロナウイルスの感染拡大で渡航できず、県内にとどまってオンライン授業に取り組んでいる。新任の教員が赴任を見合わせているため現地の学校は教員の手が足りず、子どもたちも画面越しの授業や理科の実験ができないなど影響が出ている。

## 新型 ウイルス

新潟市で教員を務め、退職後の4月から米国のニュージャーシー日本人学校に赴任予定だった矢部直美さん(63)は、自宅からオンライン授業を続ける。

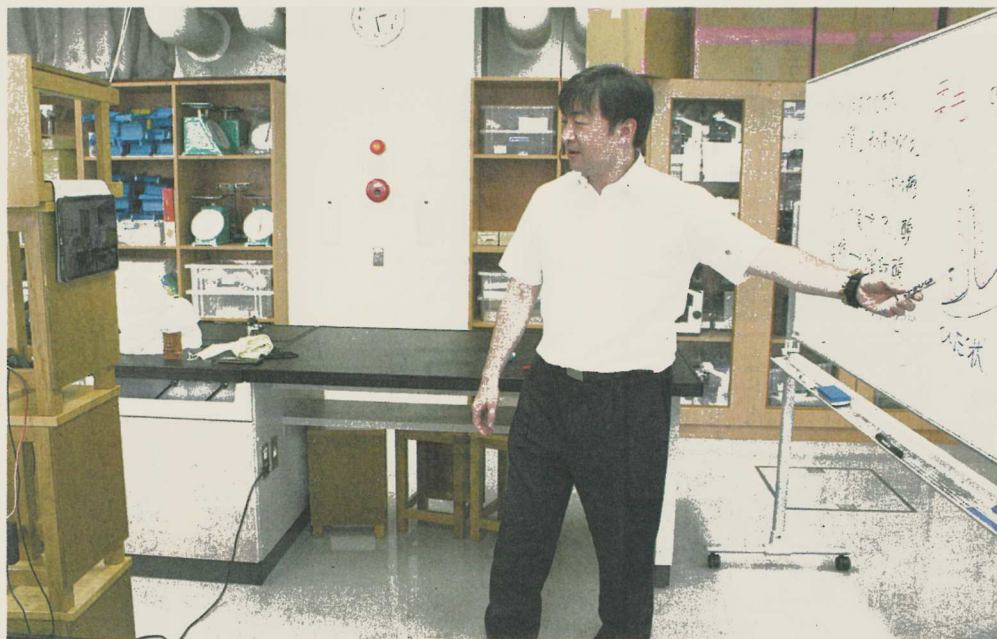
学校があるニュージャーシー州との時差は13時間。矢部さんは夜9時前から午前0時まで授業を行うが、授業内容や作成した課題を現地と共有するためのパソコン作業を毎日深夜2時ごろまで続ける。翌朝も午前中から授業や課題を準備。休憩を挟んでいるが、仕事と休憩の区切りが付けにくく長時間の作業になりがち

## 授業時差で深夜帯も 人手不足の現地支援

子どもたちはオンライン授業で小さい画面越しに授業を受け続けており、矢部さんは「指示が通りにくいこともある。長期間いっつもと違う授業形式が続ぎ、負担になっていないか」と心配する。

新潟市中央区の鳥屋野中から中国の大連日本人学校に本年度から就任予定の小池浩雄教諭(46)も、オンライン授業で対応している。

6月下旬には、市総合教育センター(西蒲区)から現地の中学2年生にビデオ



会議アプリで理科の授業をするのと見るだけでは感じ方が違う。工夫していかない。同センターで行う実験を、生徒は実際には行えない。「一緒に実験してもらおう撮影するように感じてもらおう撮影を心掛けているが、体験すらスイスのチューリッヒ日

本人学校に校長として赴任予定だった中川日里さん(52)は、18日の出発に向け準備を進める。同校では中川さんを含め3人の新任教員が渡航できず、現地で臨時講師を雇用し対応。教員1人が二つの学年の授業を同時進行で行うなど教員不足の状態だ。中川さんは「現地の教員は例年の半分ほどだが、奮闘してくれて何とか運営できている。早く行けるといい」と渡航を待ち望む。

国や県教育委員会、日本人学校に赴任経験がある教員でつくる「県国際理解教育研究会」によると、本年度は現役と退職教員合わせて10人が赴任予定。このうち現地入りしたのは、カンボジアと韓国の2人とみられる。

中国・大連日本人学校の生徒にオンラインで理科の授業を行う小池浩雄教諭(新潟市西蒲区)